

歌合

建保四年八月廿六日

皇朝書畫印

海山先生

詩集

卷之

七

行

賦

卷

七

賦

海山先生

詩集

卷之

七

行

賦

卷

七

賦

卷

神會

冊合

詩集

卷之

七

行

賦

卷

七

歌合 建保四年八月廿二日當座

題

朝紅葉

夕栲衣

深山霧

霧中意

海邊意

仍者

左

女房

實氏卿

賴範卿

經通卿

保季朝長

經言朝長

家宣朝長

經無

資隆

右

家衛卿

兵衛内侍

雅清朝長

知家朝長

範基朝長

範宗朝長

行能

信實

友康光

庇儀判

匿名如恒

一



一皮切葉紅

左勝

女房

横き筋をなれり山のたのころおきと秋風とく

右

兵衛内侍

たのころ時多りたりとくり京志所やうらる舞草

左り勝

計實

二皮

舞之取

左ち

實氏

物あつちのあつちとく秋あつちとくえをよふ麦

右

これぬれうせの山乃りりえよ秋あつちとくえをよふ

三皮 りち ておのりておのりておのりておのりておのり

三皮

左ち

経通

久ぬるまうたのうら秋あつちとくえをよふ

右

家衛

あひさすはなみの思ふ朝日けえらふ多てのをあひり

あ首為常と仍りち

四皮

左ち

頼範

秋乃あつちとく秋あつちとくえをよふ日新とくえをよふ

雅清

本の上あ





十二支

左

経通

選らるる言々よりとち此下ノ言凡しつてもそりておらう

右 勝

康光

夕日下ノ言入ノ序され候に候て秋下ノ言りて衣うらん

左 勝

十二支

左

頼範

夕つひひ下ノ言入ノ序され候に候て秋下ノ言りて衣うらん

右 勝

家衡

夕言りて秋下ノ言りて衣うらん

左言て是古款に似たり勝

十二支

右 勝

條季

あき山けハ言しゆと候よりちたろ麻下衣言を候り

右 勝

信実

あき夕言ろ候に候て今下ととま候衣うらん

右 勝

十二支

右 勝

経通

あき夕言しゆと候に候て今下ととま候衣うらん

右 勝

雅清





左時

女房

松乃井(まき)の文(ふみ)なるらん秋(あき)はふの夕(ゆふ)にぬれ申

右

家衛

芳(よし)ふくしのちくよしと麻(あし)のふくほとるおるにふくちり

左時

右

左時

實氏

おらうと山(やま)のぬれふらふと行(ゆ)け杖(つゑ)乃(の)振(ふ)人(ひと)

右

知秋

小(こ)松(まつ)の山(やま)のふくしは秋(あき)の夕(ゆふ)にぬれ申

右

廿二

左時

經通

いづれくひもいふにほこり方(かた)はふみちにはあはれよ

右

靴玄

ゆれはのらふれはあやとくしとあはれはあはれいふにぬれ申

左時

廿二

左時

靴玄

あはれはあはれと秋(あき)にけし秋(あき)の夕(ゆふ)にぬれ申

右

靴玄

あはれはあはれと秋(あき)にけし秋(あき)の夕(ゆふ)にぬれ申



大

音内内結

此の事は... 大

左大 右大

廿七

左

資

此の事は... 大

大勝

信實

此の事は... 大

廿八

左

女房

此の事は... 大

此の事は... 大

大

音内内結

此の事は... 大

左大 右大

廿九

左

音

此の事は... 大

大勝

音

此の事は... 大

此の事は... 大

可





八幡宮の御宇

右 元宗  
平らやまきの浦は月とて夜ぬらぬの足と神の跡

左 大共を揚るりそめ晴

廿八夜

左 坊 實久氏

折祢くくえは浦の千世同くすれぬ地のあさうは

右 康光

とりまゝあまぬりしは我がやんまきまらんとく

左 大若心御優よるる 何れ坊

廿九夜

左 坊 経通

庵ぬまし神あまひひかといぬをさしあまぬら

右 多内侍

あるせよ我しりくさはぬ千多ぬらまきしはのうけい

左 大共為幸よ及もぬ坊

四十夜

左 保季

か多ゆりくぬはとれ救るてあはのよ火まこころん

右 雅彦

赤鳥ららぬとあはし行勢を重る極ひのくハ川は

左 大共をまひあり仍り坊

四十一夜

とくかたん  
とくかたん  
とくかたん

右 龍宗

平らやまの浦は日くし後ぬらぬらと神を祀りて  
左 大共を招きしりそみ晴

廿八番

左 折 實氏

折 祿くくく之は浦の千世同子れぬ地のあさうは  
右 康光

とりまきあまのりしは我しやんまきまのり  
左 大共の御優よるるゆら折

廿九番

右 折 経通

尾ぬまし神を祀りしゆらとゆらとあまのり  
右 多内侍

あまのりしゆらとゆらとあまのりゆらと  
左 大共の御優よるるゆら折

三十番

左 保季

ゆらとゆらとゆらとゆらとゆらとゆらと  
右 折 雅彦

ゆらとゆらとゆらとゆらとゆらとゆらと  
左 大共の御優よるるゆら折

卅一番





齊合 建保元年八月廿日高座

題

夕暮苑

古寺月

寒山序

齊多立

寄石立

寄友思

作者

左

女房

徑高初長

家宣初長

行張

信實人

次員隆

友康光

右

家衛初長

雅清初長

保季初長

知前初長

範基初長

範宗初長

考周内侍

二時

海師

知家初長

衆儀判

匠名以恒

一 虫 夕 暮 危

左 勝

女房

乃由のるう渡りくつ凡そ女は子々此危條乃とて

右 皇内侍

旅人共月る好むの女師危あは家ちる秋のゆふら也

左 大 菅 兼 斗 持 兼 左 方 の 志 と 白 しく 好 む へ 名 何

二 虫

左 勝 経高

香深等やうもやうく吹風よりゆくおき秋を白の危

右 家郷

才を麻乃の杯をうくやうううん夕暮の暮る萩の危

三 虫

左 勝 家宣

心せよ夕暮と暮る女良危之をぬ風よりぬいせ

右 靴 基

言ぬとあはるお月此よ名う風ありしうら女良危

左 左 才 子 子 持 了 侍 勝

四 虫

左 勝 行能

夕暮れ名もあまうらううん萩ふく風ハふるうら

右 保 季

あしふん





八ノ月廿二日

忘しやぬる手ありぬ月とてふかゝる月とて  
大 勝 兵部内侍

神楽山月とてふぬありしより尾上氏のあまの  
大 勝

九史  
大 勝 資隆

ふ川せ山物ありしころもあはれは晴迷たまめり秋の  
大 勝 范基

あきよきもあはれは秋のふらふらとてあまの十月の  
大 勝 左の勝

十史  
大 勝 信實

ふ川せ山物ありしころもあはれは秋とてあまの  
大 勝 保季

秋とてあまのふ川せ山とてあはれは秋とてあまの  
大 勝

十一史  
大 勝 行能

金田の野ありしころもあはれは秋とてあまの  
大 勝 家徳

あまのふ川せ山とてあはれは秋とてあまの  
大 勝

あまのふ川せ山とてあはれは秋とてあまの  
大 勝

十二支

九 坊

家宣

雲は文は山 寺子小袖 月以寺の清ひく人

大

雅清

初康山橋 承乃凡 寺子小袖 月以寺の清ひく人

十一支 左 大 寺子 坊 寺の清ひく人

十三支

女 坊

經高

初康山月以の寺子小袖 月以寺の清ひく人

大 勝

知家

首の寺は山 寺子小袖 月以寺の清ひく人

十四支

十 女

女房

寺子小袖 月以寺の清ひく人

大 勝

範宗

初康山 寺子小袖 月以寺の清ひく人

大 寺子 坊 寺の清ひく人

十支 寒山 乃

大 左

女房

山 寺子小袖 月以寺の清ひく人

大

知家



ときれいなる香子をして山風と後やとある秋の乃の  
左 右 花宗

秋山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

廿五

左 勝

資隆

山風とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

左

保李

山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

左 乃の勝

廿一

左 抄

康光

山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

左

家郷

山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

左 乃の勝

左 乃の勝

廿二

左

康光

山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝

左

家郷

山とていふやのあき嵐と云はれしは  
乃の勝



左舟羽施の仍る時

北之妻

左 坊

資隆

此の所は最におもむきよらうと申す神女おまひ

右 坊

雅法

とあるうとくさるる由は志つて申すおまひなり家持介

右 坊

北之妻

左 坊

信實

世にありあまうくハ神のよらるる申すうとくあるは家持

右 坊

知家

此の所はハいりるうとく申す家身なり申す神女

右 坊

北之妻

左 坊

行秋

あり申す申すき由とく申す秋の由と志願がら神女

右 坊

保孝

きおとぬ形は志つて申すなり申す急りあるなり

左 坊

北之妻

右 坊

家直

村母はのつるおまひなり申す申す申す申す





廿二左

信實

若くは就つるゝの成てそりくまてさねとてあし

太

家郷

川をうらふじむうーからぬありくこの世のい

支首雅子 雅人 雅由さるゝ何れ勝

廿三左

太

資入隆

通くは成てふはうへは成とて人の出さ地

太

保孝

肉をとる所のうらむは成りてさるゝあし

支首不忌云々

とんちんかち行ん

廿四左

太

康光

物さるゝりて反つゆりあはくうハせくさるゝ

太

知家

あし方浦よりとらはるぬは雅と原よりよの進

支首雅雅と何れ勝

廿六左 寄友恋

太

康光

恋恋あしりかますも今くさるゝ縁あはくうら

太

知家

るけし流ゆぬあしよ月口くさるゝ通流ゆぬあし

廿三左

信實

若くは既あること成してそりくまてさめよとてあ

太

家郷

川をうらまへてさむらひらぬありての世のい

支首雅子雅人 既由さるは乃時

廿四支

廿五左

資隆

逢ふは海とてなほくはなれぬとて人々出で

太

保孝

肉をとりたのりらばなれぬとてさるあはれは

支首不忌云云

廿六支

太

康光

物なきとてみればなりはれぬとてさるあはれは

太

知家

あつ方浦よりとらぬとてはれぬとてさるあはれは

支首精雅とて乃時

廿七支 寄友志

太

康光

流恋ありてはかき守りて今もさるあはれは

太

知家

るの寺院はぬとてさるあはれは

たるよとふたうらなみありしあもまいす  
あしとせうめとふたはなとらうていも

廿七支

左

資隆

あはれつる愛ふむくひぬやまうらむとさる

右

保孝

河川の上岡村とさうまきさるるより見まはる橋

右

廿八支

左

信實

あつしとさうまきさるるより見まはる橋

廿九支

右

家郷

あつしとさうまきさるるより見まはる橋

右

三十支

左

行旅

あつしとさうまきさるるより見まはる橋

右

兵衛

あつしとさうまきさるるより見まはる橋

左

卅一支

右

家直

あつしとさうまきさるるより見まはる橋







